長崎県五島列島宇久島野方方言の動詞形態論

中村　京介
(博士前期課程　世界言語社会専攻)

キーワード：九州方言，肥筑方言，長崎県方言，五島列島方言，動詞の活用

修士論文目次（下線は本稿で扱う節）

1. 方言の概要	5. 動詞形態論	9. 派生	13. 複文
2. 音韻論	6. 形容詞形態論	10. 名詞句の構造	14. 意味・談話
3. 文法の概要	7. 助詞	11. 述語句の構造	付録 1. 辞書
4. 名詞形態論	8. その他の品詞	12. 構文論	付録 2. 談話

0. はじめに

本稿では、野方方言の動詞形態論を概観する[1]。§1 では方言の概要を示す。§2 では音素目録と文法の概要を概観する。§3 では動詞形態論の体系を概観する。§4 では分析において特に問題となる形式を概観する。本稿であつかう例文、図表番号、グロス、文字飾り、共通語訳は、特に断りのない限り筆者によるものである。野方方言のデータは、母語話者である NT 氏 (男性、1935 年生まれ), NM 氏 (女性、1935 年生まれ) による発話を用いた。

1. 方言の概要

野方方言は、五島列島の最北端に位置する宇久島の野方地区の伝統方言である。

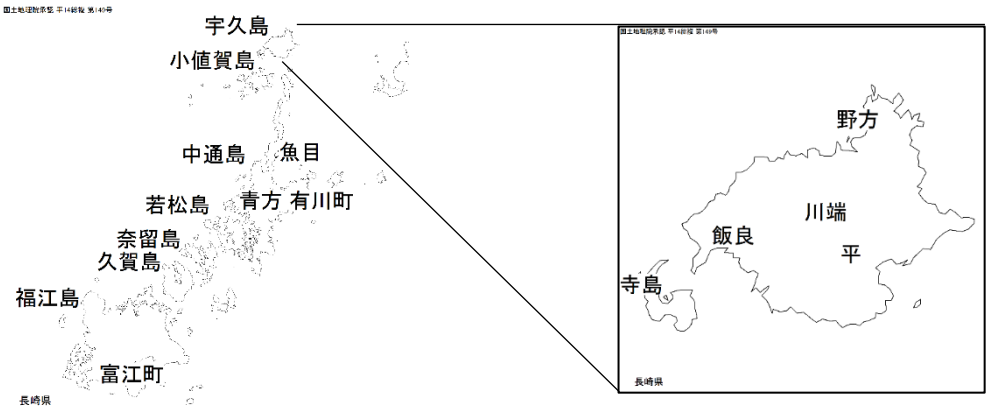

図 1: 五島列島　　図 2: 宇久島

[1] 体系的文法記述として本研究が扱う内容は下地 (2013) を基盤としている。音韻論について、分布主義的な立場から音素を設定しているが、形態音韻論的交替に関しては、基底形から表層形を規則によって導く生成音韻論的な立場にもとづいて分析をおこなった。基底音素レベル (////で表示)、表層音素レベル(//で表示), 音声レベル ([ ]で表示), 想定される古い語形 (* で表示) を区別する。"." は音節境界を示し、"#" は語境界を示す。C は子音、V は母音、G は半母音, μ は 1 モーラを表す。

本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示4.0国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja

九州の方言は、豊日方言・肥筑方言・薩隅方言の 3 区画に分けられる (上村 1983 など) 。長崎方言は、3 区画のうち肥筑方言に含まれるが、薩隅方言と五島列島方言の音韻的な類似が上村 (1969, 1970) によって報告されている。長崎県方言は、①内陸地部の方言、②壱岐・対馬の方言、③五島の方言に大別される (飯豊・日野・佐藤（編）(1983), 愛宕 (1983), 岡野 (1983), 古瀬 (1983)) 。五島列島方言の分類を試みた平山ほか (1969), 古瀬 (1983) は、宇久島方言と小値賀方言をあつかっていない。原田 (1983) は、島嶼間の語彙の類似性から、宇久島方言と小値賀方言を、五島方言に属しながら北松方言にも類似する方言であるとする。本稿では、①野方方言の音韻体系がもつ五島列島諸方言との類似性と、独自性の双方がみられること、②宇久島内の方言差の存在 という修士論文で示した根拠をもとに、本稿があつかう方言名を「長崎県五島列島宇久島野方方言」とする。

2. 導入

§2.1 では音韻論の概要を示す。§2.2 では文法の概要を示す。

2.1. 音韻論

2.1.1. 音素論

野方方言の音素目録を以下に示す。

表 1: 母音音素

	前舌	後舌
狭	i	u
半狭	e [e~^{j}e]	o
広		a

半母音: j, w

表 2: 子音音素

	両唇		歯茎		軟口蓋		声門	
破裂音	p	b	t	d	k	g		Q
			ʈ[tʲ]	ɖ[dʲ]				
摩擦音			s[s~ɕ~ç]	z			h	
鼻音		m		n				N
はじき音				r				

長母音は短母音の連続と解釈する[2]。機能負担の少ない /ʈ/, /ɖ/ は主に、§4.3 に示す*-te* 付与時に適用される形態音韻規則よって生じる。次に、音節構造と音素配列規則を示す。

(1) 野方方言の音節構造と音素配列規則

(C_1)	(C_2)	(C_3)	(G)	V_1	(V_2)	(C_4)
	μ			μ	μ	μ
s,k	n,m	p,b,m,w, s,z,t,d,n, ʈ,ɖ,j, k,g,h	w,j	i,u, e,o,a	e,o	s,m,Q,N

[2] 母音の延長・削除規則などが根拠。

音節末位の条件異音と、音素配列規則を満たすために適用される交替規則を以下に示す。

表 3: 音節末位で生じる異音・交替[3]

	規則	適用例	音韻解釈の根拠	(疑似) 最小対[4]
条件異音	/s/→[ɕ~ç] / _.	/us.no./ [ɯçno] 「牛が」	/uusi/ [ɯːɕi] 「牛に」	/wasi/ [wɐɕi] 「鷲」
	/m/→[m~ɴ] / _.	/am./ [ɐm~ɐɴ] 「網」	/aami/ [ɐːmʲi] 「網に」	/umi/ [ɯmʲi] 「海」
音素の交替	//r//→/i/ / _.	//tor//→/to.i./ [toi] 「鳥」	/toori/ [toːɾʲi] 「鳥に」	/jari/ [jɐɾʲi] 「槍」
	//n, g//→/ɴ/ / _.	//sin-r//→/siɴ./ [ɕiɴ] 「死ぬ」	/sinaɴ/ [ɕinɐɴ] 「死なない」	/akanuke/ [ɐkɐnɯke] 「あかぬけ」
		//mig//→/miɴ./ [mig] 「右」	/miigi/ [mʲiːgʲi] 「右に」	/tagirakasoi/ [tɐgiɾɐkɐsoi] 「沸かしている」
	//t, k, w, b//→/Q/ / _.	//kat-r//→/kaQ/ [kɐt̚] 「勝つ」	/kataɴ/ [kɐtɐɴ] 「勝たない」	/moturakas/ [motsɯɾɐkɐɕ] 「縺れさせる」
		//kak-r//→/kaQ/ [kɐt̚] 「書く」	/kakaɴ/ [kɐkɐɴ] 「書かない」	/aki/ [ɐkʲi] 「秋」
		//kaw-r//→/kaQ/ [kɐt̚] 「買う」	/kawaɴ/ [kɐwɐɴ] 「買わない」	-
		//kob//→/koQ/ [kot̚] 「蜘蛛」	/koobi/ [koːbʲi] 「蜘蛛に」	/abura/ [ɐbɯɾɐ] 「油」

2.1.2. 形態音韻規則：動詞語幹に付与される接辞の初頭音削除規則

-r ではじまる接辞に適用される削除規則と、その適用例を次に示す。

(2)r→Ø/C_

a. kak-r→規則(2)→kak→交替規則→/kaQ/「書く」

b. agu-r (N/A)→agur→交替規則→/agui/「あげる」

---

[3] 問題となる音素・音声記号を下線で明示した。

[4] こうした母音の脱落は先行研究でも指摘されてきた。しかし、音節末位に阻害子音をみとめる音素配列規則をみとめる先行研究はなく、母音が脱落した /C./ と、母音の脱落していない /CV./ の対立にも言及がない。中村 (2018) は、平山ほか (1969: 39) や古瀬 (1983: 195) の記述を批判しつつ、音響音声学的根拠を示しながら、音節末位に /s/ をみとめる音韻解釈を提案している。

2.2. 文法の概要

形態論上の単位の一覧と、品詞の一覧をそれぞれ示す。

表 4: 形態論上の単位一覧

語	1 つの語基と任意個の接辞からなり、形態的に独立している、文の必須要素。
語基	語の一部で、接辞が付与される部分。
語幹	屈折接辞が付与される語基。
語根	それ以上分析できない語基。
接語	語根ではない形態素のうち、形態的に独立している形態素。
接辞	語根ではない形態素のうち、形態的に従属している形態素[5]。

表 5: 品詞一覧

名詞	名詞句の主要部になることができる語。
動詞	*-ta* が付与されうる語幹に、1 つの屈折接辞を付与して形成される語。
形容詞	*-ka* を付与されうる語幹に、1 つの屈折接辞を付与して形成される語。
連体詞	接語や接辞を伴わずに名詞を修飾する形態素。
助詞	句に接続し、*-ta* が付与されることのない接語。
間投詞	それ自体で文を形成する語。
副詞	上記のどの品詞にも当てはまらない語。

3. 動詞形態論

派生・屈折からなる動詞の基本構造を示す。

語根	派生 1	派生 2	派生 3	屈折
	使役/ 可能/ 受け身	アスペクト *-or-*	アスペクト *-tjor-*	文終止/ 連体節/ 副詞節
語幹				屈折接辞

図 3: 動詞の基本構造

すべての動詞語根・語幹は複数の異形態をもつ (§3.2 で後述) 。派生接辞・屈折接辞は、動詞語根・語幹が複数もつ異形態のうち、接辞ごとに定められた異形態へ付与される。以下、§3.1 では、動詞の構造を 3 つの統語的機能にわけて示す。§3.2 では活用タイプと語幹の異形態について示す。コピュラ動詞・存在動詞の記述は紙幅の都合で割愛する。

[5] 形態的に従属しているならば、接続対象の選択制限が強い。たとえば、動詞語根・形容詞語根のどちらかにのみ接続するような要素は選択制限の強い接辞であり (e.g. *-te*, *-u*), 品詞を問わず屈折が完了した語に接続できる要素は選択制限の弱い接語である (e.g.=*te*)。

3.1. 統語機能ごとの動詞の構造

3.1.1. 文終止の構造

3.1.1.1. 直接法

時制・極性の 2 つの文法範疇によって、以下に示す屈折接辞が 1 つ付与される。

表 6: 直接法を担う屈折接辞

	肯定	否定
非過去	*-r*	*-N*
過去	*-ta*	*-zjaQta*

3.1.1.2. 非現実法

動詞の非現実語幹に接続する*-dai* などの接辞群か、未然形語幹に接続する接辞*-mjadai* のうち、1 つの屈折接辞を付与することで実現される。

3.1.1.3. 命令法

命令形語幹に付与される肯定・命令を表す接辞*-re* か、終止形語幹に付与される否定・命令 (禁止) を表す接辞*-rna* によって実現される。

3.1.2. 連体節の構造

連体節は、表 6 に示した文終止・直接法と同じ内部構造をとり、名詞が後続する。

3.1.3. 副詞節の構造

副詞節を導く接辞が、接辞ごとに定められた語幹の異形態に付与されて実現する。

3.2. 動詞の活用タイプと語幹の交替

すべての動詞は、子音語幹動詞、下二段動詞、変格動詞という 3 つの活用タイプに分かれる[6]。子音語幹動詞は、終止形語幹が子音で終わる。下二段動詞は、末音が /u/ と /e/ で交替する 2 つの語幹の異形態もつ。変格動詞は、上記のいずれにもあてはまらない。変格動詞には「する」「来る」が属する。これらはすべて、接辞にあわせて交替する異形態をもつ。

表 7: 活用タイプごとの語幹の異形態

ラベル	子音語幹	下二段	変格	付与される接辞
終止形	*kak-*	*agu-*	*ku-/su-*	*-r, -rna,*
未然形	*kaka-*	*age-*	*ko-/se-*	*-N, -zjaQta, -mjadai, -Nzuki, -zi, -na*
連用形	*kak-*	*age-*	*ki-/si-*	*-ta, -or-, -tjor-, -Ø, -te, -tara, -tati, -tar*
非現実形	*kako-*	*agu-*	*ku-/su-*	*-dai, -ka, -ga, -got, -jor* など
命令形	*kak-*	*age-*	*-*[7]*/se-*	*-re, -reba*

[6] 子音語幹動詞に分類した *mi(r)-*「見る」、*i(k)-*「行く」、*kuw-*「食べる」、下二段動詞に分類した *de-*「出る」などの動詞は、例外的な語幹の異形態をもつ。本稿では、紙幅の都合により、*mi(r)-, i(k)-*のみあつかう。

[7] 「来る」は、命令法の語形として補充形 *kee* と、*-reba* が接続した際の語形の補充形 *keeba* をもつ。

表 8: 活用タイプごとの文終止の語形一覧

語幹	接辞	子音語幹	下二段	変格
		kak-/kaka-/kako-	*agu-/age-*	*su-/si-/se-*
終止形	非過去.肯定 *-r*	*kaQ* //kak-r//	*agui* //agu-r//	*sui* //su-r//
連用形	過去.肯定 *-ta*	*kjaata* //kak-ta//	*ageta* //age-ta//	*sita* //si-ta//
未然形	非過去.否定 *-N*	*kakaN* //kaka-N//	*ageN* //age-N//	*seN* //se-N//
未然形	過去.否定 *-zjaQta*	*kakazjaQta* //kaka-zjaQta//	*agezjaQta* //age-zjaQta//	*seezjaQta* //se-zjaQta//
非現実形	非現実 *-dai*[8]	*kakodai* //kako-dai//	*agudai* //agu-dai//	*suudai* //su-dai//
命令形	命令.否定 *-re*	*kake* //kak-re//	*agere* //age-re//	*sere* //se-re//
終止形	命令.否定 *-rna*	*kaQna* //kak-rna//	*aguina* //agu-rna//	*suina* //su-rna//

子音語幹動詞には、例外的な音形の語幹や屈折後の語形をもつ語彙が存在する。

表 9: 例外的な語形をもつ子音語幹動詞

語彙	例外の所在	語形の例
ik-「行く」、*mir-*「見る」	連用形語幹の屈折	*i-te*「行って」 *mi-te*「見て」
aw で終わる動詞 (*kaw-*「買う」、 *moraw-*「貰う」)	不定形 (*-Ø* が付与された動詞と同じ機能をもつ語形)	*kjaa*「買い（に）」 *morja*「もらい（に）」
kuw-「食べる」	連用形語幹、未然形語幹、命令形語幹	*kwaN*「食べない」

以下では、「行く」「見る」について示す。「aw で終わる動詞」と「食べる」の記述は、紙幅の都合で割愛する。*ik-*「行く」と *mir-*「見る」は、連用形語幹という異形態のクラス内に、さらに 2 つの区分をもつ。すなわち、「行く」は *ik-*と *i-*, 「見る」は *mir-*と *mi-*という連用形語幹の異形態をみとめる必要がある。2 つの異形態は、付与される接辞にもとづき、次の表 10 に示すとおりに分布する。

[8] 非現実形語幹に接続する屈折接辞を代表する例として、*-dai* が接続する語形を記載した。

表 10: *ik-*「行く」連用形語幹の屈折

	「見る」		「行く」		cf.「聞く」
	mir-	*mi-*	*ik-*	*i-*	*kik-*
-Ø	*mii*	*mii*	*iQ*	**ii*	*kiQ*
-or-	*miiroi*	**mioi*	*iikoi*	**ioi*	*kiikoi*
-te	**miQte*	*mite*	**iQ*	*ite*	*kiQ*
-tjor-	**miQtjoi*	*mitjoi*	**iitjoi*	*itjoi*	*kiitjoi*
-ta	**miQta*	*mita*	**iita*	*ita*	*kiita*

-Ø を伴う *mii* の語形だけは、*mir-*と *mi-*のどちらの語幹とみなしても、正しい語形を予測できる[9]。しかし、*-or-*付与時の語形と、「行く」における語幹の交替との類似性があることをふまえ、*mii* を//mi-Ø// として分析する。「行く」と「見る」が類似の語形をみせるのは、「見る」の子音語幹化の進行と、「行く」の語幹の通時的な変化がどちらも完了しなかった結果、両者の語形のパターンが合流したものと解釈する。なお、「生きる」などのかつての上二段動詞は、野方方言においては *ikir-*のように子音語幹化している。

4. 記述において注意が必要な形式

4.1. *-r*

3.1.1.1 節に示した通り、*-r* は非過去・肯定を表す接辞である。*-r* は、古い語形である *ru の母音が通時的に脱落した結果、共時態にみとめられる接辞であるとみられる。以下、4.1.1 節では、非過去・肯定を表す接辞を //-ru// とみなさないことの根拠について論じる。4.1.2 節では、活用タイプ間で異なる屈折接辞をみとめる分析案について検証し、これを棄却する。

4.1.1. //−r//をみとめる根拠

黒木 (2015) がするように、//ru// が /i/ に交替するとみなすのではなく、//-r// が表 3 に示したグローバルな音韻規則によって /i/ に交替するとみなす根拠は、野方方言において動詞の非過去・肯定の語形には /ru/ が実体として現れることがないからである。下二段動詞「あげる」は /agui/, 変格動詞「する」・「来る」は /sui/・/kui/ となる。

さらに、//-ru// ではなく //-r// をみとめることの根拠は、野方方言の音節構造と音素配列規則をふまえた共時的な体系記述と、母音の脱落が*ru だけではなく*ri にも生じたという通時的な音変化の双方をふまえた記述が可能になることである。

以上の言語内的事実にくわえ、五島列島諸方言の包括的な記述を志向したとき、接辞 //r// をみとめることに利点がもたらされる可能性があることも、//r// をみとめることを支持する。野方方言以外の五島列島方言において、いわゆる下五島の方言を中心として、下二段動詞が非過去・肯定の語形の末音が /Q/ である方言が存在する (平山ほか 1969, 古瀬 1983)。このことに鑑みたとき、すべての五島列島方言における非過去・肯定の接辞は、母音の脱落

[9] *mi-* を語幹とみなすことができる根拠は中村 (2019) §2.6.1.1 を参照。

を経験したすべての方言[10]において //-r// であると仮定し、//r// が音節末位で ① /i/ に交替するか ② /Q/ に交替するか ③直前の母音に同化するか というグローバルな音韻規則の差異をみとめれば、非過去・肯定の語形に方言差がみられることを簡潔に記述することが可能となる。上に示した //r// の実現における 3 つの音韻論的なパターンは、動詞の非過去・肯定の語形のみならず、すべての形態素においてみとめられるパターンであるため、音節末位の //r// が /i/ に交替する交替規則を仮定することは妥当であるとみられる[11]。五島列島諸方言の実地調査にもとづく方言間比較が今後の課題となる。

4.1.2.　活用タイプ間で異なる接辞をみとめる分析案の検討

4.1.1 節で示した分析における前提は、すべての活用タイプが同一の接辞をとるという原則である。本節では、分析の代替案として、子音語幹動詞とそれ以外の動詞がそれぞれ異なる屈折接辞をとるという記述案について検証し、これを採用しない旨を述べる。下二段・変格動詞がとる接辞を //r// とみなすことについては 4.1.1 節で論じたので、本節では子音語幹がとる接辞についてのみ議論する。次の表 11 に、子音語幹動詞の終止形語幹における語幹末子音ごとの非過去・肯定の語形と、非過去・否定の語形[12]を 1 例ずつ示す。

表 11: 子音語幹動詞の終止形語幹末子音ごとの非過去・肯定、非過去・否定の語形一覧

(非過去)	b	t	k	w	m	n	g	r
肯定	*oraQ*	*kaQ*	*kaQ*	*kaQ*	*jom*	*siN*	*oeN*	*toi*
否定	*orabaN*	*kataN*	*kakaN*	*kawaN*	*jomaN*	*sinaN*	*oegaN*	*toraN*

(波線は表層形の末音の種類の境界となる列を表す)

表 11 の非過去・肯定の語形をみたとき、すべての語幹末子音に表 3 に示した音節末位の交替規則が適用されるといえる。ここから、子音語幹動詞がとる非過去・肯定接辞を //-Ø// とする記述案について検討する必要が生じる。その分析をとっても、筆者がするように子音語幹動詞にも //-r// をみとめ、それが音素配列規則を満足するために削除されるという分析をとっても、どちらでも現象を妥当に説明することが可能である。しかし、ここで問題になるのは、野方方言において //-Ø// は不定形の接辞として存在しており、記号が重複する点が望ましくないことである。さらに、非過去・肯定の接辞において活用タイプごとに異なる接辞をひとたびみとめると、ヴォイス派生接辞や他の //r/// からはじまる接辞、母音からはじまる接辞にも、活用タイプごとに異なる接辞を同様にみとめる必要が生じ、結果として動詞形態論の体系が複雑になる。筆者はそれを避けるために、すべての活用タイプが同一の接

[10] カトリックの集落で話される方言は、母音の脱落を経験していない。このことは、カトリック集落が長崎県本土から五島列島への信者の移動という歴史的な背景をもつことに由来する (古瀬 1983) 。

[11] ただし、//r// の /i/ への交替は音声学的に不自然であるため、別途説明が必要となる。/r/ と /i/ が結びつくこと自体の動機としては、F2 へのエネルギーの集中という音響音声学的な共通点があげられる。ただし、*ri のみならず後ろ舌の母音を伴う*ru がそこに合流したことには、個別の説明が求められる。これについては、/r/ が反り舌音で実現する五島列島方言が存在するとの報告 (上村 1969: 86) があることから、通時的変化過程として *rV[+high] > [ɻ] > [i] という中間段階を想定することで、説明が可能となる。

[12] その語幹末子音の存在を決定づける語形であるため記載した。

辞をとるという記述の原則をさだめ、非過去・肯定の接辞 //r// をみとめる立場をとる。

4.2. *-zjaQta*

-zjaQta をそれ以上分析できない形態素とみなす根拠は、否定を表す副詞節を導く接辞*-zi* を用いた //-zi#ar-ta// と対立することである。

(3) a. *tobazi* *aQta.*
toba-zi ar-ta
飛ぶ-NEG.SEQ ある-PST
「 (袋が) 飛ばずに (そこに) あった。」

b. *kinoo eewa* *kakazjaQtajo* *mezurasu.*
kinoo e=wa kaka-zjaQta=jo mezuras-u
昨日 絵=TOP 描く-NEG.PST=SFP めずらしい-ADV
「昨日絵は描かなかったよ、めずらしく。」

(3a)で、*aQta* は存在を表す語彙的動詞として機能しており、*tobazi*「飛ばずに」が含まれる節とは別個の節であると考えられる。しかし、(3b) の *aQta* は、独立した節として機能しているとは考えにくい。この事実と、*zjaQta* という形式中にとりたて助詞などのいかなる要素も挿入できないことを根拠として、*-zjaQta* を [否定.過去] を表す単一の屈折接辞として分析する。

ただし、*-zjaQta* の語彙的資源は//-zi#ar-ta//であると考えられる。九州方言の過去否定形式の歴史的変化を考察した久保薗 (2016) は、鹿児島方言における「ヂャッタ」は連用中止形「デ (ヂ) アッタ」に由来する可能性が高いとしている。

さらに、久保園 (2016) によると、18 世紀前半の鹿児島方言と 19 世紀以降の過去否定形式を比較したところ、「ヂャッタ」から「ンジャッタ」への変化がみとめられる。過去時制と否定を表す「ヂャッタ」と「ンジャッタ」の分布について、久保園 (2016) に記載の地図によると、調査がなされた五島列島方言において「ヂャッタ」を用いる地域はなく、「ヂャッタ」を用いる地域のうち、最も宇久島に近いのは平戸・生月方言であった。この分布のしかたは、§1 で示した原田 (1983) の考察と合致するものである。

4.3. *-te*

動詞語幹に*-te* が付与されて生じた語形を「テ形」とよぶこととする。九州方言における動詞テ形は、複雑な派生プロセスを経て出力されることが指摘されている (有元 2007, 黒木 2015, 下地 2016, 加藤・井手口 2018) 。野方方言のテ形派生規則は、以上の先行研究で指摘された線的な音韻規則をもとにして、次のように示すことができる。

(4) テ形の派生規則 (適用例は中村 2019 の §2.6.9.1 を参照)

a.	/e/の削除	V_1C-t
b.	/t/の有声化	V_1C-d
c.	語幹末子音の交替	V_1V_2-d / V_1Q-t / V_1N-d
d.	母音連続の融合	GV_3V_3-d
e.	/tj/, /dj/ の交替	/tj/→/ʈ/, /dj/→/ɖ/

f.	長母音の短母音化	GV_3-d
g.	半母音の削除	V_3-d
h.	語末音の交替	V_3-N

(4) に概要を示した派生プロセスは、有元 (2007) が見落としていたai→jaaの母音融合や、g→i の交替を含んでおり、有元 (2007) の提案する派生プロセスに改良をくわえたものである。ただし、この派生プロセスは、先行研究と同様に、/k, g, s/ という恣意的なクラスについて /i/ への交替をみとめている点が問題である。この問題を解消するために、*-te* が付与される語幹に i を介在させ、かつ (4c,d) の交替・融合を非線的な解釈によって説明するという分析案を検討することが今後の課題となる。

5. おわりに

本稿では、野方方言の動詞形態論を概観した。今後の課題として、意味機能をふまえた形態論的分析と、形態音韻論的現象への音声学的・音韻論的な説明をおこなうことがあげられる。他の五島列島方言や九州方言の文法体系をふまえた記述も今後の課題である。

略号一覧

ADV: 連用修飾 / NEG: 否定 / PST: 過去 / SEQ: 連続 / SFP: 終助詞 / TOP: 主題 / =: 接語境界

参照文献

愛宕八郎康隆 (1983) 「長崎県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一（編）『講座方言学 9 九州地方の方言』東京: 国書刊行会. / 有元光彦 (2007) 『九州西部方言動詞テ形における形態音韻現象の研究』ひつじ書房. / 岡野信子 (1983) 「壱岐・対馬の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一（編）『講座方言学 9 九州地方の方言』東京: 国書刊行会. 加藤幹治・井手口将仁 (2018) 「福岡県八女市黒木方言における子音語幹動詞のテ形派生音韻規則: 韻脚を形成しない母音の削除」第 156 回日本言語学会口頭発表. 東京大学, 2018 年 6 月 23 日. / 上村孝二 (1969) 「薩摩人の観た五島列島方言の音韻」鹿児島大学法文学科紀要『文学科論集』5. / 上村孝二 (1970) 「五島列島方言の表現文法」鹿児島大学法文学科紀要『文学科論集』6. / 上村孝二 (1983) 「九州の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一（編）『講座方言学 9 九州地方の方言』東京: 国書刊行会. / 久保薗愛 (2016) 「鹿児島方言における過去否定形式の歴史」『日本語の研究』124: 18-34. / 黒木邦彦 (2015) 「音韻規則」窪薗晴夫・森勇太・平塚雄亮・黒木邦彦（編）『甑島里方言記述文法書』, 第 2 章, 30-49. 東京: 国立国語研究所. / 古瀬順一 (1983) 「五島の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一（編）『講座方言学 9 九州地方の方言』東京: 国書刊行会. / 下地理則 (2013)「危機方言研究における文法スケッチ」田窪行則（編）『琉球の言語と文化』くろしお出版. / 下地理則 (2016) 「音素論と形態論の中間報告」下地理則・小川晋史・新永悠人・平塚雄亮・坂井美日（編）『尾前調査班中間報告書-宮崎県椎葉村尾前方言簡易語彙集と文法概説-』東京: 国立国語研究所. / 中村京介 (2018) 「長崎県五島宇久島野方方言における無声摩擦音の解釈：音節末位に/s/をみとめる音素配列規則の提案」『東京外国語大学記述言語学論集 思言』14. / 中村京介 (2019) 『長崎県五島宇久島野方方言の文法概説』修士論文, 東京外国語大学. / 原田章之進 (1983b) 「宇久・小値賀両島の方言の所属」『活水日文』9. / 平山輝男ほか (1969) 『五島列島の方言』 (都市の言語と周辺の言語 (その l)) 東京都立大学都市研究委員会・都市研究調査報告 1.